

「へだたり」と「きずな」 : J. パリアールの知覚論をめぐって

増永, 洋三

<https://doi.org/10.15017/2328572>

出版情報 : 哲學年報. 44, pp. 1-23, 1985-02-27. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



「へだたり」と「きずな」

——J・パリアールの知覚論をめぐって——

増 永 洋 三

はじめに

知覚の経験を意識的生の端緒として、もしくはその一契機にすぎぬものとして考察するのではなく、知覚的生が、客観的対象の外的知覚、自己自身の内的知覚、「叡知的なるもの」(intelligible)の知性的知覚等のすべてを包含する意識的生そのものにはかならずぬものと見做し、意識的経験一般をその本質において知覚的構造において成り立つものとして考察しようとしたのが、J・パリアールの哲学の基本理念である。⁽¹⁾パリアールはそのような視点を、極めて透徹せるM・ブロンデル哲学の研究にもとづいて、彼自らの哲学的省察の基礎として確立したのである。そこに我々は、ブロンデルに忠実でありつつ、ブロンデル哲学の根本の精神を独自に継承し発展せしめんとしたパリアールの哲学的洞察の深き意義を見出すことが出来ると考える。

知覚についての考察を、哲学の単なる一つの領域の問題の解明としてではなく、哲学そのものの根本にかかわる究極の問として扱えようとしたパリアールの試みは、パリアールの最初の著作『直観と反省』(一九二五年)に始まり、『認識の定理』(一九三七年)、『含蓄的思惟と視覚的知覚』(一九四九年)、『思惟と生』(一九五一年)、『魂の深み』(一九五四年)⁽³⁾その他のパリアールのすべての著作をつらぬく基本的態度である。

我々はパリアール哲学の独自の立場を、『思惟と生』冒頭の次の如きパリアールの言明のうちに端的に見出すことが出来る。⁽⁴⁾「我々の努力は、知覚することのすべての形式のうちに、互いに還元し難く、同時に連带的な、思惟と生を見出すことにある。認識の具体的デュナミスムは、それらの知覚の諸形式の間で演ぜられる根本のドラマである。そこにおいて思惟は、あらためて参与するために、『ひとたびは』生から身を引き離すのである。」

パリアールの個々の考察に入る前に、我々はここで予め問題の所在を概略示しておくことが必要であらう。

パリアールは知覚を思惟に先立ち思惟以前のものとする従米の多くの見方を斥けて、知覚に内在し含蓄される思惟の意義を明らかにしようと努めるのであるが、パリアールはこの問題を就中、「へだたり」(la distance) 及び「奥行き」(la profondeur) の観念と視覚的経験との関連の吟味にもとづいて、徹底的に解明しようとするのである。⁽⁵⁾それは知覚的「錯誤」(illusion) の真理性とその虚偽性の問題についての考察をめぐって展開される。そこにパリアールは、知覚的経験のプロスペクティブな直接性と、そこに既に含蓄されている「反省的超脱」(le détachement réflexif) との相互性、及び、それを可能ならしめる条件としての「へだたり」もしくは「奥行き」の果たす役割の根源性を見ようとするのである。

更に、パリアールは知覚の諸形態をあまねく支配する根本の構造として、個々の知覚の非連続的多様性と、それらを超出し綜合する反省のはたらきの統一性、対象の継起的「現存」(la présence) と、変化を通して自動的に存続する現存、視覚に即して言えは、「観点—位置」(le point de vue—situs) の事実性と「観点—目ざし」(le point de vue—regard) の観念性等のそれぞれの間に認められるべき相互的關係が根源的であることを主張しようとするのである。それらの検討にもとづいて、知覚的経験において「へだたり」と「きずな」の關係がどのようにして成立するかを明らかにしようとするのが、パリアールの知覚論を手懸りとして我々が以下に試みようとする考察の主題である。

(一)

先ず外的対象の知覚に関して、右の問題を知覚的経験に即して検討せねばならない。パリアルは『思惟と生』、『含蓄的思惟と視覚的知覚』、『シンシユテーデンのイリュージオンと知覚的含蓄の問題』⁽⁶⁾その他で繰返し視覚的知覚の特質について、とりわけ視覚的錯誤の問題を中心に論じているが、それは、パリアルが視覚的知覚は知覚一般の本質的特徴を典型的に示していると考えるからであり、又イリュージオンが問題とされるのは、それが例外的事象ではなく、視覚的知覚を成立せしめる不可欠の契機と見做されるからである。このことは次の様に説かれる。「スペクタクルが私のまなざしに呈示される時、私は私自身と事物とを意識するが、それは私が対象を肯定する限りにおいてである。しかし私がこの外的対象の性質について思い違いをすることが起り得るので、私は見かけ ('l'apparence) と実在 (la réalité) とを互いに対立させるのである。そしてたとえもし実在が見かけより以上のものであるとしても、それが私の意識の現実の内容を構成する時には、それが見かけとしてあらわれることは確かである。それ故私は、外的であれ、内的であれ、知性的であれ、一切の知覚を、言い換えれば、私が対象を肯定するまさにその時に真である限りの一切の真なるものを、意識的見かけ ('l'apparence consensuelle) と呼ぼう。それは、⁽⁷⁾我々の抽象的な概念表象 (conception) において生み出される如き見かけから、知覚的見かけを区別せんが為である。」つまり、パリアルによれば、見かけそのもののうちに実在的なものへの関係が含まれるのであるから、又意識は自発的に対象を肯定するはたらきであるから、知覚的見かけについて考察することは、意識を実在の対象から分離せしめ、対象なき主体について抽象的思弁をめぐらすことは全く別のことである。「見かけの学」 (la science de l'apparence) は、何よりも、意識的見かけに内在的なノエティックな機能に対して注意を向けねばならないのである。つまり「見かけの学」とパリアルが称するものの主要な関心事は、知覚的意識の対象の「現存」 (la présence) を肯定するはたらきと、その

下に現存が肯定される「観点」(le point de vue)の解明にある。「見かけの学」は、それ故「観点の学」(la science du point de vue)とも名付けられつゝ⁽⁸⁾。

パリアルによれば、近代の哲学的心理学の傾向は、「感受性」(l'affectivité)と「活動性」(l'activité)とを意識的実存の「本源的事実」(le fait primitif)として意識の源泉に位置づけ、両者の対立を意識的生の展開全体のうちに見出そうとすることにあつた。しかし危険は、その場合、意識が「その光の深みに即して」(selon sa profondeur de lumière)考察されていない、という点にある。パリアルは強調する、「我々の試みは、意識がそれ自身知(savoir)であり、知の前成(萌芽的形成)(préformation)であるという側面から、知覚的意識を考察するところにある。」⁽⁹⁾右にパリアルが述べているように、自らの思惟について反省する我々は、思惟を見かけと実在とに二重化する。こうして我々は、人間的思惟に内在する「含蓄的なもの」(l'implicite)を感知するのである。反省する人間は、彼の反省の対象が呈示する最初の見かけに満足しない。かくて彼はこの見かけに、彼が発見しようと努める実在的なものを対立させるのである。我々の感覚的知覚に含まれる秩序、及びそれらを条件づける判断は、直ちには把握され得ない。しかし内的生の流動に関心を向ける時、我々は感覚に含蓄される思惟を生動的に意識することが出来るのである。人間は感覚し、想像する。彼は又想起し、概念的に表象し、推理する。これらすべてのはたらきにおいて、意識は知覚以外のものではない。即ち、我々は外的対象を知覚することによつてはじめて感覚のはたらきを意識するばかりでなく、我々は又、我々が想像し、表象し、判断し、推理することを知覚するのである。その時、これらの意識作用が知覚的意識の現実の対象となるのである。そして一切のはたらきが知覚的経験として把握される時、知覚を本質的に構成する「観点の個別性」(la singularité)が重要な意味をもつて来る。⁽¹⁰⁾パリアルによれば、例えば幾何学者は、彼が一切の観点から離れて図形の特性について論証しているまさにその時、彼は推理を構成する観念の連鎖に関心を向けていると同時に、この図形を彼の個別的観点から知覚することをやめてはいないのである。ここに意識の二

重性がある。意識は対象なき主体ではなく、単なる生物学的特性でもない。我々は意識を、その個別性にも拘らず、或いはむしろその個別性によって、常に認識への或る種の関係において考察しなければならない。我々は知覚的意識のノエティックな構造に何よりも注意を払わねばならないのである。

バリエールにとって根本的に重要であるのは次の点である。即ち、論理的「きずな」が知覚の内奥に、知覚されるものを秩序づける含蓄的形式としてはたらいっているものであり、それが知覚を「比量的」(discursive) 悟性的思惟の展開に対立せしめるのである。然々の感覚、感情等が既に、それらの先行条件からの帰結には還元出来ないものを有することによって、我々はそれらのうちに既に思惟を含蓄的に見ることが可能であるのである。

しかし知覚に論理を帰するためには、更にそこに、知覚的判断の間の相互依存性の「きずな」を見なければならぬ。それは就中、視覚的知覚における「へだたり」の判断と、対象の「大きさ」の判断との間の相互依存の關係に、最も端的に示されている。バリエールによれば、この關係は就中、視覚的イマジューの「拡がり」(l'extension)と「可動性」(la mobilité)が、対象の「へだたり」を評価し判断することなしには如何なる意味ももち得ないことを示す、「増大化」もしくは「縮小化」に関するイリュージョンを検討することによって明らかにされ得る。⁽¹¹⁾我々は対象のイマジューの増大或いは縮小という変化にも拘らず、視覚的对象に一定の大きさを帰し、対象の「遠ざかり」(l'éloignement)又は「接近」(l'approche)を考慮することによって、イマジューの増大又は縮小という変化の觀念と不変の大きさの觀念とを結合し、対象の諸側面の多様な変化の下で、対象の現存の不変性を肯定することが出来るのである。こうして「へだたり」の判断は、それなしには知覚が存在し得ぬであろう「条件づけるもの」(le conditionnant)であり、現存の判断が「条件づけられるもの」(le conditionné)であることが明らかにされる。⁽¹²⁾しかし我々がこの「条件づけ」の關係に気づくのは、イリュージョン又は我々の観点の或る種の変化の場合においてである。その時に、「知覚されるもの」(le percept)を構成する「きずな」が顯在的に認められ得るのである。こうして知覚

における「含蓄的なもの」(implicite)と「顯在的なもの」(explicite)とが近づけられると共に、それらの間の対応がよりよく確立されるのである。何故ならば我々は、「含蓄的なもの」と「顯在的なもの」とにおいて、同一の論理的結合を見出すことが出来るのであるから。

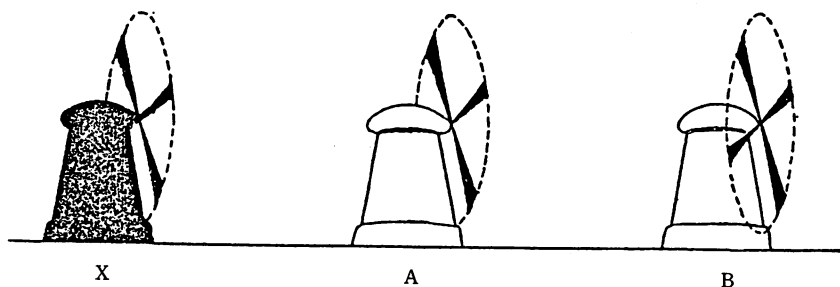
このような知覚的イリュージョンについての考察から、パリアルールは次の如き主張を導き出す⁽¹³⁾。即ち、我々は、そこから存在し得る一切の實在的なものが導出されるべき第一原理を、出発点においていわば無媒介に立てるべきではない。我々の思惟は常に互いに結ばれており、それらは単独には「要素的明証」(evidence élémentaire)をもたず、それらは互いにそれ自身とは別のものを求めあうのである。第一原理から出発すると主張する哲学者達も、実際には、彼等の明証を端的に直接的なものに求めたのではない。明証性はむしろ彼等が演繹し構成した全体にある。かかる意味で、デカルトの「單純諸本質」は相互に依拠しあうのであり、彼のコギトもそれだけで単独には第一の始源ではない。パリアルールは強調する、「常に全体が問題である。最初の音符ではなく、シンフォニーをこそ聴くべきである⁽¹⁴⁾」。かくて「これかあれか」ではなく、「きずな」そのものが原理であると言われねばならないのである。M・ブロンデルの「紐帶」(vinculum)の理説の意味するところもそこにあつたのである⁽¹⁵⁾。

パリアルールの哲学的考察は、先にもふれたように、常に比量的悟性的思惟の抽象的一面性を指摘し、より包括的な知覚的思惟の本質を解明することを目指している。この点でパリアルールは、明らかに師ブロンデルの「具体的な思惟」の立場を継承していると言ふことが出来る。そのことは、「思惟の原理を意識の生命への結びつきにおいて把握すべきこと」の要求と不可分である。パリアルールは言う、「我々は意識の陰影 (l'ombre consensuelle) が常に意識の光に伴うことを正しく認めねばならない。即ち含蓄 (implication) と反省は互いに深く結ばれており、意識の生は、包みこみ (enveloppements) と展開 (développements) とからなるたえまなき運動である。そこでは影と光とが互いに斥けあい引き離しあいつつ、〔同時に〕相互に滲透しあい混りあうことをやめないのである⁽¹⁶⁾」。このことは更に、

思惟のプロスペクティブな志向と反省的超出との「交互性」(‘alternance’)という考え方に密接に関連する。パリアルによれば、時間性の視点では、プロスペクティブな側面か、もしくは反省の側面かの何れかが、思惟において支配的であるが、しかしかかる「交互性」の下において、両者の結合は、互いに一方は他方なしにはあり得ぬ如きものである。「反省的思惟がプロスペクティブな思惟に支えられていることは極めて明白である。何故ならば、反省的思惟は「プロスペクティブな志向を」乗り越えるはたらき(‘l’acte qui surmonte’)であるから。そしてもし反省的思惟が光を導きもたらし、「現存の」肯定を正当化することがそれに属するという点で第一のものであるとしても、かかる優位性において反省的思惟は、自らではないもの、即ち、なお影のうちに、不確実のうちにとどまっているものを認知しているのである。反省的思惟が自律的思惟でないのは、それがプロスペクティブな思惟に、まさしくそれから解放されるために、従属しているという理由によるのである。」⁽¹⁷⁾ここに我々はM・ブロンデルの《cognition》の思想の影響を明らかに見てとることが出来る。⁽¹⁸⁾

意識が純粹な生命的自発性ではないのは、それがその条件の如何なるものにも還元され得ぬからであり、それが生に属し生のうちにその基礎を見出しながら、生を超出するからである。意識はこの低次の条件づけにも拘らず、まさしく意識として存在するために、その実存的条件の事実性そのものを既に反省的に超えているのである。そして又プロスペクティブな思惟も、もし反省的思惟が、たとえ含蓄的にであれ、そこに予示され投影されているのでなければ、自己を忘却しその生命的自発性の躍動のうちに消失し、意識的思惟の如何なるきざしをも残さぬことになるであろう。

パリアルは右の事態を、視覚的知覚の経験に即して、観点に拘束される意識と、観点を支配する反省との関係として捉える。即ち一方、「観点から見ること」、言い換えれば「展望的」(‘perspective’)であることが「意識」の特質であり、他方、かかる展望性を廃棄することがノエティックな「認識」の特質であるとすれば、如何にして「認識が



既に意識のうちに「含蓄的に」あり、しかも未だ意識のうちに「顕在的には」ない」ということが可能であろうか⁽¹⁹⁾。そこに、反省におけるノエティックな「観点の超出」と、「出来事」(événement)としてなお「観点のうちにある」こととの、二重の関係の秘義が存するのである。

(二)

我々はここで問題をより事象的に考察するために、パリアールが繰返し精緻な分析を試みている視覚的イリュージョンの問題についてより立ち入って検討せねばならない。イリュージョンについてのパリアールの論述は、最も明確な形で『ジンシユターデンのイリュージョンと知覚的含蓄』⁽²⁰⁾という論攷において詳細に展開されている。

パリアールは具体的事例に即して次のように論を進める。上の図が例として取り上げられる。「私は風車の翼が時計の針の方向に楕円を描きながら動くのを見る。ところが「実際には」これらの翼は円を描いて動いているのである。それ故この楕円「を描いて動く」と見える風車の翼」は斜めから見られている。図形Aにおいては、楕円軌道の右側は左側より私に近い。そこではその軌道の上半分で翼は背後から(d'arrière)前面へ(en avant)回転する「ように見える」。図形Bにおいては、それとは逆の見えが生ずる。「つまり軌道の左側が私に近く、翼は前面から背後へ回転するように見える」。図形Xは図形Aのようにも読みとれるし、図形Bのようにも

読みとることが出来る。」比量的悟性的思维の立場からは、AとBとは相容れ得ず、AかBかの何れか一つの可能性が二者択一的に選ばねばならない。これに対して知覚的視覚のイリュージオンは、かかる排他的分離とは無縁である。つまりXはAともBとも読みとれるのであり、何れか一方に決定され得ない。イリュージオンを特徴づけるのは「矛盾」ではなく、一つの定立から他の定立への突然の「飛躍」(le saut)である。このことは、比量的悟性的思维の次元のうちにそれに対応するものを見出すことが不可能な、相互排他性とは全く異なる「非連続性」(la discontinuité)である。

対象に対する我々の観点は、我々が気付かぬうちに変ぜられる。しかしその時、二つの知覚の間に時間が流れたのであり、我々は心的経験によって、イデアルにこの断ち切られた連続性を回復し得る。イリュージオンは断ち切られた秩序の断片を結合することが出来るのである。『含蓄的思维と視覚的知覚』という著作では、パリアルは視覚的知覚における「大きさ」の観念と「へだたり」の観念の關係の考察にもとづいて、知覚的意識の特質を次のように説いている。⁽²¹⁾「スペクタクルの見かけの不変性の下で知覚はたえず変化している」のであって、「不動の対象に対する不動のまなざしというものは知覚を構成しない。」単に我々が我々の位置を変えることによって我々の観点をええ得るだけではなく、我々の眼はたえず知覚されるものの全体を巡覽し、分解し、再結合する。視線の固定化は極限の場合にすぎないのである。こうして、不動と見える眼前の平原は思维の運動を隠しているのである。文節の意味が、分離された言葉にではなく、それらを結合しそれらのうちに拡がる力動的統一のうちにあるように、スペクタクルを形作るのは全体である。全体としての一つの風景は、単に「魂の一つの状態」であるのみならず、それは又「思维の統一」を示しているのである。ところで問題は「へだたり」をどう理解すべきにある。へだたりの知覚は、最初には、へだた리를迎る思维の運動の知覚にはかならない。この思维によって迎られた行程が、本源的には、「奥行き」(la profondeur)の形式の下に表わされるのである。⁽²²⁾「奥行きは全体の眺めのうちにのみ存する。」それは、「事物が精

神に對してあること〔即ち現存〕の肯定」にほかならないのである。⁽²³⁾

このへだたりの觀念と大きさの知覚の關係を、我々はどのように考えるべきであらうか。パリアールは視覚対象の「大きさ」に、「感覺的大きさ」、「實在的大きさ」、及び「見かけの大きさ」(la grandeur apparente)の三種を區別する。⁽²⁴⁾第一の「感覺的大きさ」は、それだけ別箇には知覚されないという意味で、決して与えられない。所与が知覚されるものに現存するのは、「超出された所与」(le donné dépasse)としてであり、この超出が知覚そのものである。又対象のイメージが大きさを得るのは、「知覚的脈絡の内奥において」(au sein du contexte perçuti)だけである。第二に、パリアールによれば、「實在的大きさ」も決して与えられず、又知覚されない。それは単に比量的悟性的思惟によって把握されるのみである。つまり、實在的大きさは、対象がとりきめられた尺度によって測定可能であり、互いに比較され得ることの肯定である。それは知覚される仕方からは独立な、対象の自体的大きさへの「信憑」(la croyance)にもとづくのみである。これに對して、第三の「見かけの大きさ」だけが實際に知覚されるのである。それは即ち、ある「へだたり」において〔我々からある距離をにおいて〕あると仮定された可視の対象に、我々が帰する大きさである。この「見かけの大きさ」こそ知覚的判断の内容をなす大きさにほかならぬのである。この「見かけの大きさ」は、第一の「感覺的大きさ」を機会として、我々に第二の「實在的大きさ」を肯定せしめるものである。ところでこの「見かけの大きさ」の判断は、対象が近くにある場合と遠くにある場合とで、つまり「へだたり」に應じて異なる。対象が近くにある場合には、我々は、「感覺的大きさ」を、「共働する」(concomitantes)状況にもとづいて、いわばプラグマティックに解釈する。これに對して、地平線上の太陽の如きへだたった視像の場合には、我々は対象の見えと實在的对象とを直ちに同一視することをやめるのである。こうして、「へだたり」において対象を「眺める」(contempler)ことが可能となり、その結果、知覚的意識は遠隔のスペクトルを、同時に、實在と同一のもの、であり且つ別のものであると見做すのである。この点において、視覚的知覚は認識の根本法則を象徴する、とパ

リアールは主張するのである。⁽²⁵⁾

(三)

次に我々はリアールの右の所論について、再び『シンシユテーデンのイリュージョン』の論述を参照しながら、就中「奥行き」の問題を中心に、補足的検討を試みねばならない。

リアールは言う、「対象に対する二種の経験がある。第一の経験においては、我々は一度限りの仕方で (une fois pour toutes) 対象に直面する。次いで我々は我々の観点を忘却し、専ら対象の客観的変様 (les variations objectives) に注意を向ける。このような観点の捨象が科学的態度を特徴づけるのである。反対に第二の経験によって、主体は彼の知覚的世界のうちに自己を位置づけるのである。」⁽²⁶⁾ 第一の見地は、知覚されるものの全体的説明に関して、関係のみが存在すると考える。科学的抽象の次元では、如何なるものも他のものに対して相対的にのみ存在すると見做される。

これに対して第二の見地は、第一の科学的比量的思维の相對主義を、事象を項と項の、一つの関係と別の関係の、外的結合と見做すことに由来するものとして斥けるのである。リアールは第二の見地から「知覚的連続性」(la continuité perceptive) の問題を検討し、単に対象のみを固定化して考察するのではなく、更に我々の観点をも考慮に入れることによって、そこに「観点の学」の確立を見ようとするのである。

知覚的連続性の問題点は次の点にある。例えば同一の視覚対象に対して私が観点を変え、位置 O_1 から O_2 へ移動する時、視覚的見かけも P_1 から P_2 に変化する。この時私は如何にして「位置移動」(les déplacements) の意識をもつのであろうか。私のうちに生ずる自己を動かすという感じは、それを説明するには十分ではない。位置 O_2 が、私がそれに達する前に既に私に現前していなければならないと同時に、位置 O_1 が、私が既にそれを去ったのであるけれども、等

しく私に現前していなければならない。もし各々の観点が私に他の観点を客観化することを許すとしても、なお一方の観点から他方の観点への移行は連続的なものと考えられねばならない。もしそれらの観点が一緒に包みこまれていないならば、それらは知覚的空間の二つの場所であることは出来ぬであろう。

ところで「筋肉的〔身体運動の〕連続性」(la continuité musculaire)は「継起的」(successive)であるにすぎない⁽²⁷⁾。この種の連続性は私を私自身へ各瞬間に関係づけ、私自身を記憶のうちに保持する。しかしそこでは、私は私の位置の意識をもたず、観点は決して客観化されない。更に、これらの継起的諸瞬間が全体的に保持され、「総合的で瞬時的な覚知の対象」(l'objet d'une appréhension synthétique instantanée)を形作らねばならない⁽²⁸⁾。対象が我々に対して同一的に現存するのは、対象の見かけを生ぜしめた各瞬間の覚知から独立の、いわば「見取図」(en trace)が存在する場合である⁽²⁹⁾。しかしこの「見取図」も、それ自身又一定の観点もしくは位置のうちにのみ把握され得るのである。そこに、観点の綜合自体が再び観点にもとづくという循環がある。

ところで場所 O_1 から O_2 への移行に当って、一方の位置はもはやなく、他方の位置は未だないとすると、我々は視覚的知覚の経験において、目の見えぬ人が為すことを為さねばならないと言うべきであろうか。目の見えぬ人は、彼が見ることの出来ぬ対象を内的に表象する前に、限定された場所と時において、彼を位置 O_1 から位置 O_2 へ導く自らの運動を意識し、そのことによって、同一の対象との接触を継時的に保ち続けるのである。かくてもし目の見えぬ人が彼の継起的位置 O_1 と O_2 を客観化するとすれば、それは彼が運動的に接触を保ち続ける同一対象の「連続的存在」(l'existence continue)に準拠することによってである⁽³⁰⁾。

同様にして、眼の見える人も同一対象の可視的側面の連続的变化に依拠し、彼を位置 O_1 から O_2 へ導く彼自身の「位置—観点」の変化を区別すると同時に、両方を一緒に包括するために、同一対象に「観念的に」(idéalement)自らを位置づけると考えるべきであろうか。しかしその場合次の困難が生ずる。我々は対象の見かけ P_1 から P_2 への変化に

も拘らず、同一の対象を見ていることの知覚を保つために、我々自身の観点である可変的位置に準拠しているのである。けれども他方、我々が我々の「観点—位置」 O_1 から O_2 への変化を認識するのは、不変の対象を基準にすることによってである。そこに循環がある。

この循環を避けるために、先に述べたように、科学的認識の立場では、我々見る者の「観点—位置」を捨象して、一切が対象間の相対的關係へと還元された。バリアールはかかる見地の抽象的一面性を斥けて、知覚的意識の具体的経験に立ち返るべきことを力説する。⁽³¹⁾ たしかに知覚は、秩序の内部で秩序の諸部分を見分けるために、比量的悟性的思惟を必要とするが、しかし知覚は、比量的悟性的關係によってはくみつくされ得ない具体的な豊かさを内含する。

又、先の目の見えぬ人の経験について言えば、彼は対象を位置に、そして位置を対象に継時的に關係づけ得るのみであって、彼自身の位置の変化と対象の変化との「同時的實在性」(la réalité simultanée)を肯定し得ぬであろう。目の見える者にあつては、視覚的知覚によって、継起的なものの総合的覚知が可能ならしめられるのである。具体的知覚においては、比量的に辿られた諸關係は相互に求めあい且つ制しあつて、それらはもはや循環に陥らぬ如き仕方で連帶的に結ばれあうのである。「奥行き」(la profondeur)は、すべての關係を單なる継起的「系列的秩序」(l'ordre sériel)へは還元され得ぬ仕方で予示する具体的關係にほかならない。⁽³²⁾ 「奥行き」は、同時に、観点と対象を相互に區別し、且つ相互に結びあわせるのである。こうして奥行きは、同一の「はたらき」(l'acte)において、事物を我々に關係づけ、我々を事物に關係づけるのである。従つて、我々が眼で対象の変化する見かけを辿りつつ位置を変える時、奥行きは、観点の変化と対象の変化とを、同時に關係づけることを我々に可能にするのである。奥行きは、対象の見かけの変化と位置の変化との両側面の相対性を、唯一の「はたらき」へと構成するのであり、かくて観点と対象は、この奥行きの経験に即して、共に實在的であると言ふことが出来るのである。

こうしてバリアールが知覚の「本源的綜合」(la synthèse originale)と名付けるはたらきは、その細部の差異に關

してはたえず変化せしめられるが、生の組織化の仕方そのものにおいては、即ち「継起的に」(successivement)ではなく「連帶的に」(solidairement)生を組織化する仕方に関しては、常に同一であり続けるのである。このことは、視覚的知覚におけるイマジューの役割をよりよく理解せしめる。もし奥行きによって空間があらゆる方向にうがたれ、すべてが対象であり、又観点であることが可能となるとすれば、同一のイマジューは、それが対象を構成するか観点を構成するかに応じて、知覚され又は知覚されずにとどまり得るのである。この後者の場合にイマジューは、そこにおいてイデアールな奥行きが、対象の「遠ざかり」(l'éloignement)⁽³³⁾、大きさ、位置等を我々に判断せしめるための、感覚的媒介の役割を果すのである。

先の風車の翼の運動の例で言えば、我々に斜めから見られた風車の翼の運動を様々の異なった方向において把握せしめるのは、「影と、光のたわむれ」(une ombre, un jeu de lumière)にはかならずイマジューの所為である。⁽³⁴⁾イマジューとは、イデアールな奥行きに従う知覚の知性的シェーマの延長であり完成である。我々はそこに、含蓄的思惟のいわば我々に知られざるはたらきを認めねばならない。「含蓄的思惟は、偶然にではなく本質的に、知られざる理由によって決定された知覚的判断の様式である。」⁽³⁵⁾

かくて我々は、具体的関係を抽象的関係の比量的悟性的結合によって再構成すべきではなく、我々は常に知覚のうちにとどまるべきであるのである。そこでは、観点と対象は同時に変化する。しかしここでは、一切の変化は奥行きにおける本源的综合のうちに包含されている。この本源的综合は、然々の客観的見かけを通して対象の同一的現存を、そして対象においてすべての観点の客観性を我々に肯定せしめるのである。

パリアールによれば、かかる「奥行き」の本源的综合にもとづいて、視覚的知覚の「展望性」(la perspective)が成り立たしめられるとされる。「展望」(la perspective)は、視覚的知覚にとつて、「分析なき総合」(une synthèse sans analyse)の感覚的表現であるのであるから、我々はそれぞれの観点のうちに、他の観点が我々に呈示する「見

かけ」の可能性を、そして一方から他方への連続的推移の可能性を覚知することが出来るのである。

このようにして諸展望は相互に交渉しあい、各々の展望は自己の制限を超出して全体的眺望を手に入れるのである。これがまさしく知覚における、含蓄的なものから顕在的なものへの思惟の運動にはかならない。そして完全な知覚が可能であるとすれば、そこにおいては含蓄的思惟と顕在的思惟とは相互に接しあうのである。

奥行きは、まさしく、対象と観点を結合することによって、同時に、対象と観点を対立させるのである。それ故奥行きは、そこにおいて思惟が繰り広げられ始める「脱含蓄化」(la dés-implication)⁽³⁷⁾、即ち含蓄的なものの顕在化の媒体であり、両者の間の「中間領域」(la zone moyenne)である。

パリアルは以上の如き考察から次の帰結を導き出す。⁽³⁸⁾第一に、知覚的イリュージオンは、「体験された錯誤」(l'erreur vécue)であると同時に、感覚のうちに参入させる判断である。そしてイリュージオンの形成に精神が介入すればする程、イリュージオンに含まれる含蓄的思惟の役割は大となるのである。

第二に、イリュージオンが生ずるのは、一方、我々が知覚的意識の未決定性にとどまることを嫌うからである。しかし実は、かかる未決定性、即ちあれかこれかではなく様々の可能性を内含することこそが、知覚的経験を比量的思惟への抽象化から解放し、そこに豊かさと深さをもたらすことを可能にするのである。

第三に、真理は、含蓄的思惟と顕在的思惟との間の或る種の対応に存する。知覚が真であると言われるのは、幾何学的秩序への関連づけによってである。しかしこの場合、両者の間の同一性ではなく、「対応」(la correspondance)が問題なのである。何故ならば、知覚を構成する「本源的綜合」と幾何学的秩序におけるいわば「分析的綜合」との間には、異質性が存在するのであるから。

かくて第四に、イリュージオンの真理が存在すると言わねばならない。我々の観点の主観性が知覚の見かけとその非連続の原因であるが、先の「ジンシュテーデンのイリュージオン」の例証において示されたように、「観点—位置」

の制限にもとづく知覚の見かけの非連続は、「へだたり」における、更には「奥行き」における本源的綜合によって、イリュージオンのデュナミックな連続、即ち知覚の見かけの間の連続的推移とその交互性の関係へと超出され得るのである。そこに我々は、イリュージオンが真であると言われ得る所以、及び、知覚的経験の「展望性」と知覚に内在する含蓄的思惟の独自の意義を認めることが出来るのである。

(四)

バリアルは外的知覚について考えられた「観点—位置」の主観的制限と「観点の支配」による反省的超出との関係と類比的な関係を、「内的知覚」(a perception interne) 即ち自己についての知覚にも認めようとする。この内的知覚についてのバリアルの論述に関しては、徹底的な考察を必要とする多くの問題が存するが、本稿ではそれらの中で何よりも先ず問わるべきものについて以下に若干の論及を試みるにとどめる。先ず『思惟と生命』の叙述に即して、⁽³⁹⁾ 内的知覚の特質についてのバリアルの所説を検討し、内的知覚がどのような意味において外的知覚との類比において理解され得るかを明らかにせねばならない。

問題は何よりも、自己自身の知覚にはかならないこの内的知覚において、我々がどのようにして、外的知覚における「へだたり」と「きずな」の関係に類比的な関係としての、「相互的条件づけ」(le conditionnement réciproque) と「媒介」(a médiation) の構造を見出すことが出来るかにある。我々が「我あり」と言う時、もしくは「我があることを我は思惟する」と言う時、この「我あり」は少なくとも「我思惟する」から切り離され得ない。何故ならば、この「我思惟する」なしには、「我あり」はそもそも問われ得ぬであろうから。

それでは「我思惟する」はどのように理解されるべきであろうか。バリアルは次の仮定から論を進める。即ち、「我」は一切の不透明な実在からへだてられた「我思惟する」のはたらしにほかならないことを仮定しよう。しかし

「我」は何を思惟するのか。もし「我」が世界を、外的世界を、又内的世界を思惟せぬならば、「我」とは言葉の上だけの幻想以外のものではないであらう。「我」は少なくとも自己自身を対象とすることによって、即ち「我思惟すること」を我は思惟する」、の如く自らを構成することによって、はじめてあり得るのである。しかし「我」はその時、純粹主体としての自らの「不可視性」(invisibilité)を失なうことによってのみ、はじめて自己を見、自己を肯定することが出来るのである。そこでは「我」はもはや純粹な主体としての「自我」(Je)ではなく、「私」(moi)である。勿論かかる思惟の対象としての「私」は、それ自身「半透明な」(translucide)ものと思われる。又は少なくとも感知し難い微妙な差異によってのみ、その主体としての「我思惟する」から区別されるにすぎないと思われる。けれどもまさにこの微妙な差異がすべてなのである。そして「我思惟すること」(quod)を我は思惟する」という従属接続詞のうちに表現されているのは、まさしくこの本質的差異なのである。それは純粹な内面性でもなく、純粹な自己同一性でもない。それが純粹な内面性ではないのは、明晰性と実在性に関して十全なる内面性において自己を思惟し、もしくは自己を肯定するという、自己の自己への完全な合致は、人間の意識の事実ではないからである。

人間の意識はかかる十全の合致を萌芽的瞬間のうちにのみ含むのであって、この萌芽は意識の反省的構造によってはじめて展開されるのである。かくてここで我々は根本の原理へと導かれる。この「我思惟すること」を我は思惟する」とは何であるかが、あらためて問われねばならない。それは端的に言えば、「反省的媒介」(la médiation réflexive)の最も直接的な、そして同時に最も抽象的な表現にはかならぬのである。この段階の抽象においては、「差異」は意識内容の差異ではない。それは、自己を十全に自己自身に合致せしめて実現することの出来ない思惟の本質を表わすはたらきにかかわる差異である。「我思惟する」は、自らが発見されてはじめて自らを本源的に再認するのである。

「我思惟する」がその主体的「上昇」(l'ascension)の頂点において保持されるのは、「我が思惟すること」が客体的に肯定される「再下降」(redescendre)を条件とする限りにおいてのみであることが、反省の本質に含まれ

る、とパリアルは主張するのである。⁽⁴¹⁾ かかる『我が思惟すること』を「我は思惟する」の、思惟のはたらきにおける根源的接合は、「低次の条件づけ」(le conditionnement inférieur) が同時に「高きより」(par le haut) 条件づけられていることの表明である。そこに又、同一の思惟において、内的分岐、へだたりと、きずなの相互的關係が開示されていることを我々は見てとることが出来るのである。

パリアルがプロスペクティブと名付ける思惟の諸形式——それは「前方へのまなざし」(un regard en avant) 以外のものではないが——は、そのうちに「ノエティックな構造」を反映させているが故に、はじめて思惟であり得るのである。⁽⁴²⁾ この「ノエティックな構造」が感覚的なもののうちに受肉され多様に展開されていることによって、「相互的条件づけ」の關係が、「遠心的志向」(efférence) と「求心的収斂」(afférence) との互いに連帶的な形式において表わされ得るのである。即ち統覚的「自我」(Je) は、低次の条件づけに従えば、個別的に肯定される「私」(moi) に依拠するが、他方、「私」は高次の条件づけに従えば、個別性を統覚的に超出する「自我」に依拠するのである。⁽⁴³⁾

ところで「私」(moi) の主要な特質は、その多様なあらわれにおいて「同一」(le même) であるということ、即ち、同一的「自我」(Je) の持統的イマージュであるということにある。その内面化された形式の下で、「私」は自らの歴史を自らに語ることによってのみ実存する。その自らの歴史に「私」は、異なった側面の下での「私自身」にはかならぬ「私」の「感情」(le sentiment) を統合するのである。パリアルにおいて「感情的含蓄」(l'implication sentimentale) は、ノエティックな含蓄と共に、自己認識の二つの源泉と見做される。⁽⁴⁴⁾ しかし又「私」は、私が想像する「他なるもの」(l'autre) である。何故かと言えば、プロスペクティブに前望することによって、その都度「私」は私自身の誤まれるイマージュを破壊するのであるから。

しかしながら、「私」の未来は見えざるものであり、予見し得ぬものである。我々は直接にプロスペクティブに「私」の未来にその相貌を与えることは出来ない。かくて「私」は、過去の「想起」(le souvenir) によってはじめて、未

来の「期待」(l'attente) たり得るのである。⁽⁴⁵⁾ここに、「私」と「自我」との関係に関して「想起」の果す重要な役割が、即ち、「へだたり」における「きずな」としての意義が存するのである。「私」を「自己へのまなざし」(le regard sur soi) として構成するもの、「観点」の意識の「彼方に」(au delà)、瞬時的努力の「彼方に」私にその内面性を与えるもの、それは「過去の夢想」(le rêve du passé) にはかならない。かくて、与えられる「生」(la vie) と、そのはたらきの統一性によって覚知を条件づける「自我」、及び、イリュージョンによってのみ固定され得る「現存」(la présence) の間で、「私」は常に「動く知覚」(la mouvante perception) を構成し続けるのである。この私の「動く知覚」は、所与である「生」と、条件である統覚的「自我」、及び「ノエティック・サンティマンタル」な相互的含蓄の関係にもとづく「現存」の間に均衡を確立することを許さぬのであって、それこそがまさに意識の「不十全性」(l'inadéquation)、『その「内的へだたり」を明らかに示しているのである。

「外的知覚」における「観点」との類比に即して言えば、観点の意識が「私」に最初に、外面性のうちに身体的実存として自己を見えることを許すのは、空間における「観点—位置」の、「観点—まなざし」による「客観的綜合」が、更にそれ自身諸々の「観点—まなざし」の「主観的綜合」によって、即ち、異なった側面の「現在における想起」(un souvenir dans le présent) によって伴われる限りにおいてである。⁽⁴⁶⁾

メヌ・ド・ビランが、同一の「欲せられた努力」(l'effort voulu) は、繰返されることによって人格的同一性を保証し得ると信じたとすれば、それは、この努力のうちに、もしくはこの「根源的事実」(le fait primitif) のうちに、ビランが「時間のうちなる思惟」(la pensée dans le temps) を見たからであるのみならず、より深くこの根源的事実のうちに、各々の意識にとってそれと共に「時間が始まる」ところの「はたらき」(l'acte) を見たが故である。⁽⁴⁷⁾しかし我々はより明確に、「我は思惟すること」を「我は思惟する」の反省的構造に従って、いったんは生成から身を引き離しへだてられることによって、生成のうちに反省的に自己を投げかけ、生成を時間化する「はたらき」(l'acte)

もしくは「我思惟する」の「超時間性」(extra-temporalité)を肯定せねばならないのである。時間は、思惟が時間のうちにあり、同時に時間を支配するが故に、言い換えれば、思惟する主体は「自我」(je)としては時間をのがれるが、「私」(moi)としてはそれに従属するが故にはじめて、時間としてあり得るのである。我々の思惟は継起する。それらの思惟を「自我」は、意識の瞬間のうちに枚挙し「同時化する」(simultanéiser)のである。現実の「私」であった意識の瞬間が想起において再現される時、意識の諸瞬間を総合的に覚知する「自我」の同一のまなざしの下での、今の瞬間におけるこの「よみがえり」(la réviviscence)が、私に、二つの瞬間に且つ唯一の「はたらき」(l'acte)において自己を見ること、即ち自己を再認することを可能にするのである。かかる「精神的な」(spirituel)自己の自己との二重のふれ合いに、「想起」が存するのである。⁽⁶⁾再認を理解するための第一の条件は、再認を「含蓄」(l'implication)を顕在化するノエティックな思惟として把握することである。再認が再認としてあり得るのは、「私」を私自身になじませ、非連続性の支配を通して、「私」の継起的諸相を総合的に覚知する「自我」のまなざしによってのみである。そこに我々は内的知覚における「へだたり」と「きずな」の独自の関係を見ることが出来る。しかしかかる「自我」の「総合的覚知」(l'apprehension synthétique)は如何なる努力の結果でもない。努力は「私」の想起の経験的作用にのみ存し得るのである。そして又この「私」の想起は、完全には「私」の力に属さないものである。我々が想起し再認しようと努める時、我々は模索するのであり、「呼びさまし」(l'évocation)の誘いまねきによって助けられるのである。我々は再認が現出することをいわば待ち望まねばならないのである。我々は我々の思惟の絶対的支配者ではないのである。我々の思惟は「能動的認識」(la cognition)であることにはつくされ得ず、「受容し同意する認識」(l'agnition)によって支えられ導かれるのである。ここに時間性の二重の意義が存する。即ち、時間は「自我」が支配するものであると同時に、「私」のみならず「自我」も時間の媒介に依拠せねばならないのである。

要するに「内的知覚」に関して大切なことは、内面性は外面性を媒介とし、両者は相互的であること、我は自己を

二重化し、いったんは自己を過去へ沈めることを介して、自己を再認し同一化し得るということを理解することである。自己認識は二契機に分岐せる一なるものに存し、へだてられたものを「結びあわせるはたらき」(きずな)にもとづくのである。

暫定的に結論すれば、「自我」は「本源的綜合」の「きずな」(Le lien)そのものである。「自我」は、それなしには、時間も、内的記憶的知覚も存在し得ぬであらう「きずな」そのものにはかならぬのである。「自我」は時間や記憶的知覚の諸要素を外部から取り集めて来るはたらきにすぎぬのではなく、「自我」はまさしくそれらの「原理」(Le principe)そのものである。「自我」が「きずな」であり結びあわせるものであるのは、「自我」が「感情的含蓄」(l'implication sentimentale)の陰影によって包まれた「ノエティックな思惟の光」、「認識のまなざし」にはかならぬからである、と言わねばならない。

内的知覚の問題については、なお解明されるべき多くの困難が残されている。又、バリアールの知覚論全般について言えば、更に「知性的知覚」(la perception intellectuelle)と言われるものの検討、就中「論理性—合理性」(la logique—la rationalité)と「叡知性」(l'intelligibilité)との関係についての考察が、⁽⁵⁰⁾知覚的意識の本質の解明にとつて欠くことの出来ぬものであるが、これらの残された問題を究明することは次の機会にゆずらねばならない。(未完)

註

(1) J・バリアール(Jaques Palard)は一八八七年サン・エティエンヌに生まれる。エックス(Aix)の大学でM・ブロンデルに学ぶ。一九一一年教授資格試験に合格し、一九一一年から一九二〇年までヴァランスのリセで哲学を教える。一九二二年以降エックスの文学部講師、一九四〇年教授に任ぜられる。その間一九二五年に、『直観と反省』及び『メーヌ・ド・ピランにおける推理』により学位を取得し、以後、「意識の生」における「含蓄的思惟」の問題について、独自の考察を豊かに展開する。同時にM・ブロンデル哲学の研究を深め、『M・ブロンデル又はキリスト教的超出』その他の著作によって、ブロンデル

ル思想の最もすぐれた理解者であり継承者であることを示す。一九五一年に刊行された主著『思惟と生命』において、含蓄的なものの顕在化である「生の反省としての思惟」という自らの思想を体系的に確立する。ハリファールは生涯、M・ブロンデルにいわはつきそうように、エックスの地を離れることなく、思索と著述に専念し、一九五三年没する。

- (2) ハリファールのブロンデル研究は生涯続けられたが、その成果は晩年にはじめて刊行された。《M. Blondel ou le dépassement chrétien》1950; 『L'idée de lien, dans la philosophie de M. Blondel』(Etudes philos., numéro spécial sur Blondel, 1950); 『Le sens du réel dans la philosophie de M. Blondel』(Revue de métaphysique et de morale, 1951)

- (3) 『Intuition et Réflexion』(Alcan, 1925); 『Théorème de la Connaissance』(Aubier, 1937); 『Pensée implicite et Perception Visuelle』(N. E. P., 1949); 『La Pensée et la Vie』(P. U. F., 1951); 『Profondeur de l'âme』(Aubier, 1954) じれらは、ハリファールの著作のうち、メーヌ・ド・ビラン哲学及びブロンデル哲学についての論述を除いたハリファールの主要著作であり、ハリファールの独自の思想の理解に不可欠のものである。

- (4) 『La Pensée et la Vie』, p. 1. [以下『PV』と略記する]

- (5) 「くだたり」もしくは「興行き」の問題が意識の経験の考察において根本的に重要であることは、既に「ラシニエに於て指摘され、ラシニエに於ては「興行き」についての考察が、彼の「全体的現存」の哲学の出発点をなしている。

(J. Lachelier, *Psychologie et métaphysique*, 1885; L. Lavelle, *La Perception visuelle de la Profondeur*, 1921)

M・キルニヤン、ペリノーの著作や「くだたりの世界」として特徴づけられ (M. Nédoncelle, 『Une Philosophie de la Distance』, *Etudes philos.*, N°4, 1954)

- (6) 『L'illusion de Sinsteden et le problème de l'implication perceptive』(Revue philos., 1930)

- (7) 『PV』, p. 3. (8) 『PV』, p. 114. (9) 『PV』, p. 15. (10) 『PV』, p. 40.

- (11) 『PV』, p. 41. (12) 『PV』, p. 44. (13) 『PV』, p. 55. (14) 『PV』, p. 56.

- (15) M. Blondel, 『Une énigme historique : le "vinculum substantiale" d'après Leibniz et l'ébauche d'un réalisme supérieur』1930.

- (16) 『PV』, p. 61. (17) 『PV』, p. 62.

- (18) M・ブロンデルの『agnition』の語についてハリファールの次の論が重要である。『L'idée d'agnition dans la philosophie de M. Blondel』(Revue philos., 1938)

- (19) 《PV》, p. 74.
- (20) バリアールはヘルムホルツ (Helmholz) の『生理学的光学』(l'Optique physiologique, 1867) において援用されている。ドイツ医師ジッシャーデン (Sinnseden) の観察事例に準拠して、視覚的イリュージョンの問題を検討している。《L'illusion de Sinnseden et le problème de l'implication perceptive》として《IS》に略記する。
- (21) 《Pensée implicite et Perception Visuelle》(以下《PIPV》に略記する) p. 4—7.
- (22) 《PIPV》, p. 11. (23) 《PIPV》, p. 12. (24) 《PIPV》, p. 16—17. (25) 《PIPV》, p. 19.
- (26) 《IS》, p. 391—392. (27) 《IS》, p. 393—395. (28) *ibid.*, (29) *ibid.*, (30) *ibid.*, (31) *ibid.*, (32) *ibid.*, (33) 《IS》, p. 371—377.
- (34) 《IS》, p. 397. (35) 《IS》, p. 398. (36) 《IS》, p. 399. (37) 《IS》, p. 400.
- (38) 《IS》, p. 402—408.
- (39) 「内的知覚」の問題が最も詳細に論ぜられているのは『思维と生命』第三部第二章「自己のイメージ」に於いてである。
- (40) 《PV》, p. 203. (41) 《PV》, p. 202—203. (42) *ibid.*, (43) 《PV》, p. 204.
- (44) バリアールは「感情的全端」と「ノエティック全端」の関係を《Les deux sources de la connaissance, note sur la pensée implicite》(Revue philos., 1953) に於いて主題的に論じている。
- (45) 《PV》, p. 208. (46) *ibid.*,
- (47) バリアールのメッセ・ユラン哲学に対する評価と批判についてはム・マッサ (P. Masset) の《J. Pallard lecteur de Biran》(Etudes philos., N°4/1978) が示唆に富む指摘を含んでいる。
- (48) 《PV》, p. 209.
- (49) バリランシエが「注意」(l'attention) と「祈り」(la prière) の間に深いつながりを見たように、バリアールにとっても「想起」は一種の「恩寵」(une grâce) の如く我々に到来するものとされる。(《PV》, p. 210)
- (50) 「叙知的なるものの肯定」として「知性的知覚」については『思维と生命』第三部第三章「光のイメージ」において詳細に論ぜられている。